

おんゆうじゅう、つて、パツと見が、おまんじゅう、に似ている。

子どもの頃、ヘンテコな自分の名前があんまり好きじゃなかった。もっと、ふつうの名前だったらよかったのに、と思っていた。めぐみ、ひろこ、かずえ、ゆうこ……友だちの名前が羨ましかった。ゆうじゅう、なんて名前はケツタイだ。名前だけじゃない。苗字も、なんか皆と違う気がしていた。おん、だなんて。

そう思っていたのは、私だけではなかった。小学校一年生のとき、友だちと歩いていたら、上級生の男の子二人がやっつけて離し立てた。

おんゆうじゅうだ、おんゆうじゅうだ。

何故、人の名を連呼しながら彼らは異常に楽しそうなのか。私は何ともいえない気持ちだった。更に彼らは、私と一緒に歩いていた友だちにむかって、言った。

おんゆうじゅうの仲間だ。おんゆうじゅうの仲間だ。

私の友だちは何ともいえない顔で私を見た。友だちの名前は、きぐちまゆみだきぐちまゆみだ、とは言わないのだろうか。まゆみちゃんはまゆみちゃんなのに、何故、おんゆうじゅうの仲間にされてしまったのだろうか。失礼じゃないか。そして、私はあんなに親しげに接してくれた上級生の男の子二人の名前を、知らない。思い出せないのではない。初めから知らないのだ。彼らは名乗らなかった。

ではどうして、彼らのほうは私の名前を知っていたのだろうか。私が有う。まゆみちゃんの名前がへんだったからだ。おんゆう名だったから？ 違う。名前がへんじゃなかったらよかった。うじゅう、という名前がふつうじゃなかったらよかった。私は思った。もっと、ふつうの名前のことだった。ふつうの名前とは、日本人らしい名前のことだ。冒

自伝『遠い場所の記憶』の冒
エドワード・サイドは、自信『遠い場所の記憶』に
頭で「長年のあいだ、私はその場その場の状況に応じて、『サイド』に
『エドワード』のほうは早口ですっ飛ばし、『サイド』に
強勢を置く、あるいはその逆を行う、あるいは間髪を置か
ず両者をつなぎ結果的にどちらも不明瞭にする、という手
段を使い分けてきた」と書いています。彼は、アラブ系の「エドワー
ド」という自らの姓名を他人に名乗るとき、「相手方の
アミリーネームである「サイド」と英国風の「相手方の
ド」という自らの姓名を他人に名乗るとき、「相手方の
不審そうな、それゆえにこちらの信用を足元から崩すよう
な反応」がとても苦痛だった。彼も、そうなのか。

彼もなのか、と私は思った。彼も、そうなのか、と訊き返さ
れるのが茶飯事だった。相手に訊き返されると私は、いつ
も自分のほうが何となく申し訳なくなくて、おんです、と
なるべく丁寧な言いなおす。それでようやく相手も、珍し
いお名前ですね、とやっつけてくれると今度は訊かれもしない
のに、台湾人なんです、と自分から説明をしてみよう。次